小和田　哲男教授(静岡大学教育学部長)

「戦国の合戦場・築城地と地形・地質」

1.はじめに

戦国武将たちが合戦をする際、ときには、全く偶然のような形で進んできた両軍が衝突し、そこで合戦がくりひろげられるということがあったが、多くの場合、お互い、「そこらあたりが戦場になりそうだ」と認識していたというケースが一般的だったと思われる。

また、片方の側が、作戦を考え、より有利な場所に敵を誘いこみ、合戦をしかけるということもあった。戦場となる場所の選定は、その意味において、すでに一つの戦略としての要素をもっていたのである。

そのことは、城地の選定についても同様で、築城に際し、「地選」が、「地取」、すなわち、縄張や、「普請」「作事」といった具体的な築城工事と並ぶ重要な位置付けを与えられていたことからも明らかである。

ただ、従来から、合戦場にしても築城地にしても、地形についてはかなり論じられてきながら、地質についてはあまり触れられてこなかったきらいがある。そこで、今回は、地形と地質の両面から考察を加えることにしたい。

2.合戦場の地形と地質

具体的に、どのような地形・地質の場所が合戦場として選ばれたかをみるために、古戦場名から合戦の場所についていくつか拾い出してみよう。

原……用土原・江古田原・高見原・三方ヶ原・関ヶ原
河原…塩川河原・飯田河原・神流川・戸次川・中富川・姉川
山……舟岡山・今山・大沢山・布部山
坂……手這坂・尻垂坂
峠……勝弦峠・三増峠・有屋峠
台……国府台・三船台
野……般若野・栃檀野・阿気野
畷……田手畷・沖田畷・浅井畷
橋……人取橋
狭間…桶狭間

これは、それぞれ、冒頭の用土原でいえば、用土原の戦いという名称でよばれているもので、たとえば、天正3年（1575）の、ふつう長篠の戦いの名でよばれている戦いも、厳密にいえば、長篠の戦いと設楽原の戦いの二つから成っているわけで、設楽原の

戦いでみれば、原に分類されるものである。

また、三方ヶ原も、戦いの名称は三方ヶ原の戦いであるが、原であると同時に、三方ヶ原台地なので、台に分類することもでき、その意味では、分類そのものは大まかなものといってよい。しかし、だいたいの傾向はつかめるのではなかろうか。

実際に、戦国の合戦を合戦場面で分類すると、圧倒的に多いのが、原と、川を含めた河原である。川の場合、ある戦国大名の領国と別な戦国大名の領国の境界となっていることが多く、それだけ、川が敵対する戦国大名同士の接触地点となりうるわけで、戦場に選ばれる可能性も高かったものと思われる。

しかし、それだけではなく、川をはさむ形で河原が展開し、かなりの軍勢が集結できるという点もポイントになっていたものと考えられる。その意味では、原と河原は共通しているといってよい。

戦国のはじめのころは、合戦といっても比較的小規模なものが多く、軍勢の数も、合わせて1000とか2000といった程度であった。ところが、次第に弱小大名をのみこんだ形の強豪大名になると、一度に動かせる軍勢の数も2万とか2万5000といった数にふくれあがり、両軍合わせるとかなりの軍勢になり、広大な場所が要求される。

戦場として選ばれる場所が、原とか河原となることは、ある意味においては必然的なものだったという側面もある。

もっとも、原・河原は、多くの場合が、遭遇戦である。あらかじめ、両軍とも、そこらあたりが戦場になりそうだという見通しのもと、軍事行動を取っているわけで、お互い、自軍に有利な態勢にもっていこうと、虚々実々のかけひきが展開され、その結果として衝突ということになる。

ただ、遭遇戦でも、原・河原が選ばれないこともある。というのは、当時、「兵多きが勝つ」といういい方があり、ふつうの遭遇戦で、広大な原とか河原では、軍勢の多い方が圧倒的に有利だったからである。少ない軍勢で、しかも遭遇戦が避けられないときには、作戦を考え、隘路(あいろ)が選ばれることもあった。

隘路という点で一般的なのは峠である。合戦名に峠の字のつくケースは結構あるが、峠を守っているところに敵が攻めこんできて戦いになるということも少なくない。

また、隘路ということになると、水田や沼地の中の一本道である畷も注目される。視界の点ではひらけているので隘路という感覚は弱いかもしれないが、水田や沼地は人が移動する点では不適であり、いきおい、一本道としての畷を通ることになり、軍勢の隊列が縦に長く伸びきったところを、鉄砲などでねらい撃ちされてしまうこともある。

天正12年(1584)3月18日の、龍造寺隆信と島津家久が戦った沖田畷の戦いはその典型例といってよい。

島原(長崎県島原市)の前山の山麓から海岸までは低湿地で、深田となっており、その中央部を2、3人がやっと通れるほどの畦道があり、沖田畷とよばれていた。島津家久は、龍造寺隆信率いる大軍をこの沖田畷に誘いこみ、細長く伸びきった隊列めがけて鉄砲で攻撃し、龍造寺軍を破っているのである。

この場合、地形だけではなく、一本道以外の部分が深田になっているという地質とも関係していた。

なお、この深田の地質的な点でいえば、さきにみた長篠の戦いの設楽原の戦いで、織田信長が設けた馬防柵の前面、連吾川の周辺が深田になっていた点も最近、注目されるようになってきた。

武田勝頼側の騎馬武者が、連吾川を越えようとしたとき、連吾川の水によって灌漑されていたまわりの水田が深田となっていたため、馬が深田に足をとられ立往生しているところを信長軍の鉄砲隊にねらい撃ちされたのである。粘土質の地質が織田・徳川連合軍に幸いしたといえる。

ところで、従来から、隘路をうまく使った例として取り沙汰されているのが、永禄3年(1560)5月19日の桶狭間の戦いである。この戦いは周知のように、2万5000という大軍を率いて尾張に侵入した今川義元が、桶狭間で、織田信長の2000の精鋭部隊による奇襲で敗れ、義元は首を取られ、その後、今川氏が衰退に向かうことになった戦いである。

地名の桶狭間の「狭間」は窪地の意味で、事実、桶狭間周辺は窪地が多く、今川軍2万5000が、そうした谷底のような窪地を縦一列になるような形で進軍しているところを、信長軍が急に襲ったため、義元は首を取られたと解されてきた。

ところが、実際、義元が昼食休憩を取っていたところは窪地の底のようなところではなく、桶狭間山という山の上であった。桶狭間の戦いの場合は、戦いの名前になっている地名が必ずしも戦いの地形なり地質を意味しているわけではないので、注意が必要なところである。

3.進軍路上の地形・地質の問題

戦いにあたって、軍勢がどこをどのように通ったのかが文献的に明らかになっている例もあるが、わからない場合も少なくない。そのようなとき、進軍路を確定していく上で該当しそうな場所の地形や地質の検討が不可欠となる。

これまでのところ、そのような視点からの研究は必ずしも多いとはいえないが、方法論的にも注目される先行研究があるので少しみておきたい。

天正5年（1577）2月に、織田信長が紀州の雑賀を攻めたことがあったが、その進軍路が不明だった。

進軍の様子については、太田牛一が著わした『信長公記』巻十（角川文庫本）に、つぎのように記されている。

二月十三日、信長公、城都より直に淀川をこさせられ、八幡に至つて御陣取。十四日に雨降り御滞留。東国の御人数真木嶋・宇治の橋を打渡り、先兵風雨を凌悉く参陣なり。

二月十五日、信長公八幡より若江迄御着陣。十六日、和泉の内香庄御陣取。国中の一揆、貝塚と云ふ所海手を拘へ、舟を引付け楯籠り、翌日、先陣の衆貝塚へ取懸け攻干るべきの処、夜に入り舟に取乗り罷退き候。少々退後候者討捕り、頸を香庄へ持来り御目に懸け、十七日、根来衆杉の坊参り御礼申上げ、雑賀表御一篇の御請申し候キ。

2月13日に京都を出発した信長軍が、15日に若江に着陣した。ここまでは何の問題もない。問題はそこから先である。若江から、16日に和泉国の香庄というところまで進み、そこに着陣したことになっているが、その香庄というのがどこかわからないのである。

これまで、和泉国香庄の候補地としては、つぎの三つがあげられている。

(1)現堺市津久野町の神野町
(2)現泉佐野市上之郷付近
(3)現岸和田市神於（こう）付近

この3ヵ所とも和泉国内に属してはいるが、『信長公記』にみえる香庄という地名ではない。

そこで、この謎に挑戦した太田宏一氏は、信長軍がそれぞれ3ヵ所の地点に到達するためにどのようなコースをとるかを調べ、予想されるコースの地形縦断面図を作り、詳細に検討した結果、(3)は考えられないとし、可能性としては(1)が一番高いとした（「天正五年信長雑賀攻め進軍路」『和歌山市立博物館研究紀要』3号、1988年）。(3)は図1のように、縦断面図を作ると、進軍路の高低

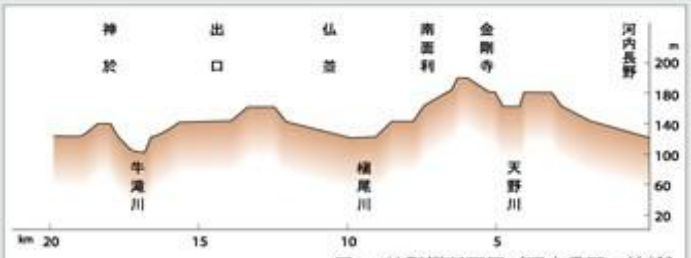

図1　地形縦断面図（河内長野～神於）

差がありすぎ無理だと判断したのである。今後、こうした方法論はもっと駆使されてよいのではないかと思われる。

4.築城地の地形と地質

つぎに、築城地の地形と地質についてみておきたい。冒頭ふれたように、築城にあたって、どのような地形・地質のところを選地するかは、「地選」といって、築城にかかわる人にとっては重大問題であった。いい場所を選ぶことができるかどうかは、名築城家とよばれるかどうかにもかかわっていた。単なる縄張の優劣ではなく、築城地の選定は名城とよばれるための大前提であった。

その場合、どうしても、山城とか平山城といった、山や丘陵を利用した城の方が難攻不落というイメージがあり、「平城は、軍事面では山城や平山城より劣る」といったうけとられ方をしているようである。

ところが、実際には、平城でも、難攻不落といわれるような城を作ることは可能だった。そのポイントになるのが深田である。

さきに、沖田畷の戦いと設楽原の戦いにおける深田の効用についてみたが、それと同じことが平城の場合もあてはまる。

つまり、城の周囲に沼地などの低湿地をめぐらせておけば、城攻めにあたる人馬が足をぬかるみにとられ、前進できなくなるという状況を作ることができる。

これは、実は鉄砲の伝来とも密接にかかわる点で、ぬかるみに足をとられ、前に進むこともできず、後に退くこともできない人馬をねらって、城中より鉄砲を撃てば、相手を倒すことができるのである。鉄砲伝来後、平城が急激に増加するのは、こうした地質を十分計算した築城が増加したことの反映だったといっても過言ではない。

地質が築城と深くかかわっていた例をもう一つあげておこう。よく、「関西の城は石垣が多いのに、関東に石垣の城が少ない」といわれるが、これも、地質と密接に関係していたと考えられる。

関東は、地盤そのものが関東ローム層で固い。地山を削ってそのままでも崩れず、いわゆる切岸という形での利用が可能である。つまり、地山を削って急勾配の角度をつけても、わざわざ石垣を積む必要がない。

それに対し、近畿以西は、地盤はやわらかく、地山を削って土塁状にしても、何年かたつと崩れはじめてしまい、そのままでは役にたたない。そこで、石垣を積んだりすることになる。

関東の後北条氏が築いた城に障子堀という手法が用いられていることはよく知られているが、これも、地盤が関東ローム層だったから可能であった。

障子堀というのは、簡単にいえば、空堀に畝状の部分を掘り残したもので、ちょうど、空堀に障子をたてたような形である。これは、堀底が敵に道として利用されるのを防ぎ、同時に、畝と畝の間の移動が容易にはできないので、鉄砲がねらいやすくなる。具体的には、後北条氏の本城である小田原城をはじめ、支城である韮山城・長久保城・山中城・下田城などにみられるが、関東ローム層という地質の特徴をうまく築城法にとり入れた例といってよい（図2）。

図2　小田原城二の丸中堀の障子堀

なお、きわめて珍しい例ではあるが、活断層を、そのまま城の堀に利用したケースもある。

豊臣秀吉が築いた伏見城にはいくつかの堀が残っているが、その一部が「活断層地図」に活断層として出ていた。それをみた城郭研究者が、「それはおかしい。あれは、秀吉が掘ったときの堀である」と主張していた。

ところが、発掘調査をした結果、もともと活断層だったのを、堀として有効に利用したものだということがわかった。自然地形を巧みに縄張にとりこんだ例である。

5.おわりに―「砂上の楼閣」も実在した―

よく、基礎が非常に弱くて崩れやすいことのたとえとして、「砂上の楼閣」という言葉が使われる。

実際には「砂上の楼閣」はありえないと考えられているが、意外にも、「砂上の楼閣」は実在した。たとえば、遠江の横須賀城（静岡県大須賀町）は、砂丘の上に石垣を積み、その上に建造物が乗っていたのである。もちろん、図3に示したように、粗朶垣を埋め

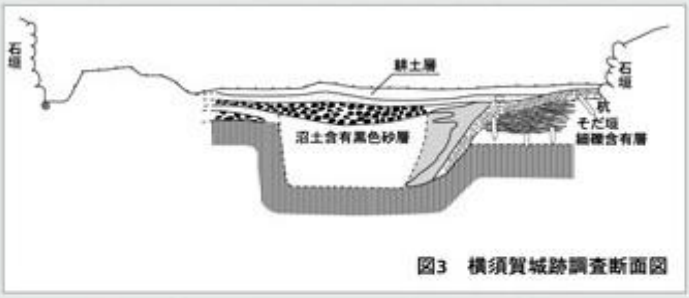

図3　横須賀城跡調査断面図

こみ、石垣が崩れないための工夫をしており、築城者は、地形・地質をあらかじめ十分に調査し、工夫をこらしていたことはいうまでもない。

合戦場にしても築城地にしても、やはり、地形・地質を十分に知りつくし、上手に利用した戦国武将が勝ち残っていったとの印象をうける。

注）図2は『昭和59年度史跡小田原城跡二の丸中堀発掘調査概要』による
注）図3は『史跡横須賀城跡保存管理計画策定報告書』（昭和59年）による